



アラソン

ローマ人のプロポII
【2014年3月号】

翻訳：高村昌憲

ローマ皇帝と同じ位に裕福であったセネカ(1)は、世界中で一番美しい庭を所有していました。彼はそこに小さな小屋を建てて、硬いベッドと木製の碗を幾つか用意しました。そこで彼は週に一日は貧乏生活を実践していました。両手を使って仕事をして、クリームチーズと干し葡萄と灰色のパンの夕食を摂って、優れた哲学者の本を何頁か読んで、星々の運行を眺め、最後には満足して眠りました。彼の精神や両手で、世界の悲しみや喜びをそんな風に吟味して、金持ちとしての辛い仕事に取りかかることが出来て、公共広場のフォーラムに降りて行って愚かな言葉を聞き、年老いた女優たちと夜食を摂り、ネロ帝の音楽を我慢して聴くことが出来るのは何故なのか、私は自問します。

酒を飲んで酔っぱらわない限り人生に我慢出来ない人間に、私は同情します。口笛を吹かれて野次られる俳優に、私は同情します。皺の数を数える色っぽい女に、私は同情します。死のうとしているけちんぼ、冠を取り逃がした野心家に、私は同情します。軽蔑された恋人は、眠れずに草の上の鯉のようにベッドの中で寝返りを打ちます。取分け、病気の血が浸透して行く者で、他人を喜ばせて豊かにさせて置いて、だんだんと毒を飲んで死んで行く者に、私は同情します。体のあらゆる処が、動脈であちらこちらに毒が回っている時、そして血液の脈が波のように広がって行った時、最も純粋な水で苦い味を防げることが出来る者は、決して世界中に沢山はいないでしょう。

以上のような人々は本当の病人です。もしも悲しみが或る人々を和らげるなら、他の人々を悪化させるのは疑いの余地のないことです。しかし、それから逃れる良い方法は、夜のキャバレーや劇場を彷徨しないことであるのを誰もが知っています。その上、欲望や喜びの抑制は、お金を沢山持つにつれて難しくなるのは明らかなことです。家の屋根までの葡萄の木をよじ登っている不自然な田舎の職人を、私が同情するのを何故あなたは望むのでしょうか。

私の質問が的を外れているのを私は知っていますが、無神論者が神のことを話すように、私はお金持ちのことを話します。私はお金持ちになったことはありませんでした。私が言っているのは莫大なお金持ちのことです。私はその味を知りませんでした。絶えることなく諂いがあり、言葉は無いのと同じで、葡萄酒よりも良く酔わせますし、多分何よりも慰めになります。そこから人は現実を忘れるようになり、他人の眼の中に自分を見るようになります。幻想であるのは確かです。しかし、もしもそれが幸福を与えるのであるなら、誰が好きにならないのでしょうか。

よろしい。神秘的な狂気は幸福を与えます。あなたは狂人になりたいですか。モルヒネは幸福を与えます。何故あなたは私の小さな注射器が気に入るのでしょうか。アルコールは幸福を与えます。酔っ払いましょう。豊かさは全てを慰めるのでしょうか。そうです、事物の概念を見失ったとしたら、そしてその本当の認識を見失ったとしたら。それ故に何も言わないことです。私は沢山のことを望むでしょう。もう一度言います。どんな病気にも効く薬を見付けるためには、私は大変に愚かなことでも望みます。元気でいましょう。人々は頭が良いことよりも、手を上げて殴られたくないのです。でも誰も手を上げません。

(一九〇九年六月十一日)

(1) 古代ローマのストア派の哲学者(前二頃~六五)。ネロ帝の教師であったが、反逆罪で自殺した。

無政府主義者たちは敗走しています。彼らの後をそんなに遠くまで走って行ってはいけません。〈戦争技法〉で言われているように勝利も無く走って行ってはいけません。私は今、自由を恐れている人々しか知りません。或る人が昨日、私に言いました、「公務員は、自分の業務以外でも完全に自由な意見を言えるものなら言ってみなさい、と私はあなたに言う」。

しかし、そうあらねばなりません。私たちに国家理由の口実を頼もうとしても無駄です。決して自由を恐れてはなりません。太った官僚たちが信じていることは、彼らの一人が無能で不誠実であるのを公然と告発するや否や、全てが失われることであり、そのことを私は良く理解しています。そうなれば彼らの威光は最早無くなり、冠も地に落ちるのははっきりしています。そうなのです。しかし、まさしく私たちには王も陛下も威光も必要ではないのです。秩序は確かに私たちには嬉しいものです。法律も同じです。しかしそのために私たちは、王にマントを身につけさせて異様な姿にしたり、崇拜したりしません。

〈共和制〉とは、少なくとも私が理解する限り、それは〈君主制〉とは全く別のものです。敬意は法へ行くのであり、人間へ行くものではありません。そのことは殆どの指導者たちを喜ばせはしないでしょう、何故なら彼らの野心は歴史を育まないし、夢は崇められないからです。そのことは臆病な人々には怖いのです。何故なら、彼らは規律と尊敬を決して区別出来ないからです。言い換えれば群衆がぺこぺこ頭を下げる前で、劇場の王や神が行うような権力を行使出来るとは思っていないからです。

しかしながら私たちは、服従と尊敬を上手に区別するようにならなければなりません。それは共和主義精神の基本です。その行動に頭を下げるのであり、それと同時にその思想を立て直すことです。それが申し分のない公務員である、と少なくとも私はそう理解しています。それは少しも奴隷などに眼を向けるものではありません。それは自由な人間であり、彼は自由と意志で命令に従うのであり、出来る限りより優れた者に従うのであり、判断を下すのは彼が従った者であり、そのことを隠したりしません。

あなたは限度があると言います。そして部下は決して上司の悪口を言ったり、言われた命令を実行しながら「インターナショナル」を歌うことは決して出来ないと言います。よろしい。業務において服従することとは、先ずは沈黙を守ることです。つまり業務と関係のない言葉を控えることです。この点からすると人が望むのと同じ位厳しいことですが、私はそのことに同意します。つまり事務所で「インターナショナル」を歌う人は厳しくやられます。厳密に同じやり方で罰せられるのでしようが、もしも「月の光で (Au clair de la lune)」とか「上等な煙草を持っている (J'ai du bon tabac)」を歌ったとしても、同じ理由です。しかし、上司たちは既にそのような精神からは遠く離れています。全て反対で、彼らは全てを許すでしょうし、人々がそれらに賛成するなら必要なことを行います。それは職務を果たしたいという思いであり、技能や手腕ではありません。そして、受勲される日にはダイヤモンドの十字架が彼らに与えられるようになり、多くの現実の事物に眼を閉じることになるでしょう。喜んで彼らは神のように言います、「行為は重

要ではない、少なくとも良く私を愛することが重要だ」。

(一九〇九年六月十二日)

小売りすることは、普通の術です。そこで財産を手に入れるためには負けてはなりません。そして、そう考えるのも容易ではありません。商人のブシコーやショーシャーという名人たちのことを考えると、売れ行きの良い商店を両親から貰って全て一人でやって来た若い金物商人を私は思い出します。彼は何本ものペンチを見せてから、私はその中から選ぼうとしました。私が見て判断する限り同じペンチを二本見ましたが、値札を見ると片方の方が高い値段でした。彼にその理由を尋ねると、高い方を私に見せて言いました、「こちらの方が品質が高級です」。私はなおも問い詰めたので、ペンチのことは良く知らないように見えたこの善良な若者は、重大な秘密を打ち明けるように、ついに私に言いました、「ご覧なさい。値段は同じ時のものではないのです。この値段は古い値段なのです」。明らかにこの金物商人には悪意が無いのが分かりました。彼にとって商売とは、値札を読んでお金を受け取ることにありました。

値札をその様に読む人々を私は他にも知っていました。彼らは暇そうであり、或る人々はランプを、他の人々は傘とかナイフの値札を読んでいました。全員が確信をもって馬鹿げたことを言っていました。全員が単純な原則を思いついていました。つまり値段が高い物は必然的に良い品であるということです。彼らの中で最も狡い人々は、何処まで狡いかあなたをご存知でしょうか。尋ねられたことを彼らが答えない時は、あなたにこう言うまでです、「もう自分は売らないよ。私たちは良い物を沢山持つことにしている」。もしも正義があったなら、この力に頼っている商人たちは皆破産するに違いありません。

この世には、信じられない位に公平でないことが沢山あります。私は嘗て、年々大きくなって行った廉売店の店長を注意深く観察しました。或る日、私がカミソリを選んでいると彼は言いました、「一つ、二つ、三つ、と満足するまでやって下さい。そして私のことなんか気にしないで下さい。あなたのお役に立つことが、私の役にも立つのです」。私はその言葉を鵜呑みにしました。そして私は、彼が考えたことを話したのだと思いました。カミソリだけでなく、全てがそんな調子でした。彼は言いました、「もしもお客さんが欲しい物を私に聞いてくれなかったなら、私は売る物を如何に知れば良いのでしょうか」。その上、彼は人が欲しい物を全て売っていましたが、商品を片付けるためでなく、お客が欲しい物のために気を遣っていました。それは私が知る限り、お金儲けというよりも寧ろ知性の結果でした。何故ならお金儲けそのものは、即効的で確実な利益のことしか考えないからです。反対に知性は、大変に明瞭な契約や助け合うことも考えたいと思っています。そこには商売に関してナポレオン一家が行ったことがあります。彼らは、買手に背中を向けるや否や、買手をあざ笑う様な一寸した様子を見せる悪知恵は決して持っていません。彼らにとって売ることは、自分たちの金庫に他人の財産を入れることではありません。売ることは、売る人も買う人も二人の人間をお金持ちにすることなのです。貪欲だけではそこまで高められません。知性は、巧妙さを公平さに変えるものです。そして多くの人々は、行かねばならない処まで上手に行きます。これだけは言えるのですが、彼らは行くのが時として少し早すぎるのです。

(一九〇九年六月十四日)

〈富裕者〉の代表者たちは、倫理学や政治学のアカデミー会員である最長老の家での秘密会議に集まっています。その最年長者は市民道徳を称賛するためには、鉄道員や労働者にも慣れなければならない話を明瞭にするのも大切でした。理工科学校を卒業して顎ひげの毛が三つになっていた若い技術者は、一般的注意の中で次のような会合計画を読み上げました。

「駅員、運転手、釜たき、転綴手、信号係、踏切番、線路坑夫の諸君、ご機嫌よう。そして、心豊かな人々に感謝申し上げます。大衆の大槌が老女を無視し、株主を結びつけ、会社員を結びつける固い友情を無視し、利己主義者たちや人間とも思えない大袈裟な演説を行う者たちが、あなた方の気に入られ感動させることを恐れる今日、あなた方は〈富裕者〉に揺るぎない忠告を、言葉と行動により一度ならず明確に主張したのであり、疲れを知らないアトラスと同じで、早くその財産から解放されて自由になりたいのです。

あなた方がつまらない作品を必要としたり、夜中の十二時の警備、物静かな勇気、英雄的な死を必要とする時に歌うのは如何なる詩人でしょうか。しかし、私の文章は決してそこまで自分を高めないでしょう。私はあなた方の小さな家、花咲く庭、陽気なあなた方の子供たち、上機嫌、そして忍従をお祝いしたいのです。月に百フランで妻や子供たちに服を着せたり養うことが出来ることは、富裕者には決して理解出来ないことなのです。でも、少なくとも感嘆して見ることは可能なことです。

内戦を説く者たちは皆、私たちにその気がないとあなた方に信じさせたがっています、何故なら私たちは年に五〇万フランか六〇万フランも使うからです。不公平であることを最早誰も非難しません。いいえ、違います。私たちは盲目でなければ、恩知らずでもありません。私たちはあなた方が疲労したり、徹夜したり、病弱であることに利益を図りました。この裕福者という河の流れは、私たちの金庫を一杯にする財源になる場所を知っています。私たちは、如何なる夜警監視人が川床を掘って頑丈な堤防にそれを閉じ込めているのかを知っています。私たちは、如何なる水門の番人がこれらの整備の仕事を配分しているか知っていますし、彼らは私たちの庭の花を咲かせてくれます。私たちの妻たちは冬の薔薇を摘みながら、あなた方のことを思います。子供たちは、小さな時にはあなた方を尊敬していますし感謝しています。実際は、あなた方は宗教的な瞑想生活をしていないのでしょうか。最も幸福なのはどちらでしょうか。幸福を与える人でしょうか、貰う人でしょうか。あなた方の高貴な心がそれを決めるでしょう。全責任を負っている人々を、決して憎まないことは困難であると言われていています。私には分かりません。恐らく、汚れた花瓶に善行を注いだ時のように、何らかの卑劣な魂も醗酵して酸っぱくなり味を変えます。私は憚ることなく公然と言いますが、私たちの魂はもっと高尚なものです。そして、もしも私たちの認識も高貴な精神にまで高めなかったとしても、私は敢えて素直に意を決して言いますが、手を赤く血で染めることなく、あなたと握手出来ます」。

この話は満場一致で賛同されました。彼は皆の気持ちを表明したのです。しかしながら尊敬すべき最年長者は、何か些細なことでも変えるのは保留する、と正直に言いました。彼は言いま

した、「基本的には完全ですが、言い方があるのです。若い友よ、仕事の細部まで全て精通するようになるのは、あなたの年齢ではないのです」。

(一九〇九年六月十六日)

婦人帽のヴェールに反対する文書を私は昨日読みました。流行は全く宗教に似ています。形式としては常識的で理論的ではありませんが、聖遺骨や形見のようにそこに隠されているのは何らかの合理性を何時も含んでいます。所々に小さな黒い球のある大きな網の目をしたヴェールが、風や埃や太陽から柔らかな顔を、余りしっかりと守らないということが大変容易に分かります。実際に、そんなことは決してあり得ません。

もしも婦人帽のヴェールのことを理解したいならば、片目を瞑ってあなたの家に向き合う家を見詰めることです。もし全くの新築でなかったとしたら、沢山の割れ目や雨であちこちに変な形に広がっている黒い埃で出来た小さな砂丘のようなものが見えるでしょう。あなたが見ている間、しみや割れ目の一点に本能的に眼が行きます。

さて今度は、あなたの視野に黒い網目を掛けて、その網目を見て下さい。直ぐにしみや割れ目が混じり合って、洗淨班がそこを通過したように灰色一色になって溶けたように見えます。それはあなたの眼が網目の一点へ行っているから起こるのです（あなたは、網目が手許に無かったとしても、家と同時にペンとかコンパスの先端をじっと見ることは全く簡単に出来ます）。その時からあなたは、家や蜥蜴や埃の細長い跡に視線が行かなくなり、混じり合ったイメージになります。

女性の顔というものは見られるのを望んでいます。（私は大きな帽子やごてごてした装飾品で身を飾ることを言っているのです。）女性の顔には、誰にも蜥蜴や割れ目やしみがあります。勿論、丁寧な洗顔に取りかかり、白いオイルや口紅で顔の表面を変えることは出来ます。しかし、それで順調なのは見た目でしかなく、遊女に見られるならそれで良いでしょう。大変に目立った水玉模様の婦人帽のヴェールも同じ働きをすることになります。何故なら私たちの眼は何時も強烈に書かれたものに惹きつけられ、そこを見ることしかしないからです。眼の焦点は顔と婦人帽のヴェールの間を行ったり来たりして揺れ動きます。従って小さなしみや赤斑や皺は大変に軽く見て目立たなくなり、桃の実のような柔らかい感じを与えます。高級な婦人帽のヴェールは、美顔料のビンやごく軽い白粉と同じです。

そこにあるのは沢山の物理学であり、私たちは軽率で、そんなにもそのことを長く考えないとあなたは言うでしょう。間違いありません。有益な制度というものも婦人帽のヴェールも同じです。大部分の人がロザリオの祈りを言うように当たり前婦人帽のヴェールを身に付けます。或る人々は向こう側へ行っ、その効果を観察します。皆は気に留めていませんし大変に軽率です。顔の皺は、愛と美の女神ヴィーナスよりも、知識と芸術の女神ミネルヴァのためには良いものになるでしょう。

(一九〇九年六月十八日)

三十六 四本足の理由 (LA RAISON A QUATRE PATTES)

社会学者は言いました、「あなたの抽象的な思想や過激な共和主義者の平等を私は信用しない。事実を学ぼう。事実の中から行動しよう。状況を斟酌しないで、あらゆる国に一律の正義を押しつけないと願うのは馬鹿げている。例えば、我が国の普通選挙制度は間違いであった。大衆の真意は、そんなにも大きな変革を準備していなかった。そこから模索や間違いや折衷体制が生まれたのだ」。

老賢人は答えました、「この折衷体制は自由と平和の四十年間を私たちに与えました。今、やり残していることは、私たちが耐えている悪い政治、職場の圧力、無能の大臣、陰謀、腐敗、あちこちで起こっている暴動（私は最悪としている）は、一流で通っている多くの人々が表している〈考え〉のまさに軽蔑の結果かどうかを知ることです。何故なら、近視眼的な専門と先を見通した利益との連合によって、全ての権力又は殆ど全てのものが、あらゆる力で民主主義的努力に抵抗しています。国民は統治し、管理しません。しかし、その政治機構の中には避けられない軋轢があります。改革というものは現実の事実に対峙しているのです、社会学者さん。権利の名によって、事実に対峙しています。あなたが何を言っても、事実が無視されることもあり得ます。それは可能です、何故なら決して忘れて仕舞わないからです。何時も大変な楽観主義者ですが、何時も完全ではないからです。法律は法律であり、正義は存在しなければならないものです。そこでは人間の生活というものに光を当てます。しかし、私には後悔しもなく、絶えず臆病者で怠け者だったのであり、早々に一度ならず言ったことです。誰もが不可能でいたくありません。私が正しい社会のことを考えた日から、合理的な言葉で社会的契約を表現したいと思えます。ところで私が人に勧める契約とは何でしょうか。あなたは服従することを約束し、私は支配することを約束するのでしょうか。契約というものは平等を前提とします。私が可能なことは、あなたにも可能なことなのです。そうでないと一部の人間は他の人間にとっての家畜でなければならなくなって仕舞います」。

その社会学者は言いました、「しかしながら平等は自然にはなく、それ以上に正義もありません」。

老賢人は生き生きして言いました、「えっ、誰がそれを疑っているのですか。そうです、情熱や欲望や怒りがあります。やくざや泥棒や高慢な人がおります。まさしくこれらの悪に反対して私たちは社会を作ります。そうです、正義は事実の中にありません。いいえ、全ては自然であり、人間にとっての動物の部分というものは、法律に抵抗します。それがまさしく出来る限り法律を望んで運用する理由であり、犬が骨をもぎ取った人に吠えるように、欲望や野心や恐怖から、辺りに吠えても驚くことはありません。彼らは私自身に吠えているように私の周囲にも吠えますが、それは大変に自然です。しかし、その〈理由〉は四本足になり始めているのです。それらと共に再三吠えているのです。それは謝肉の火曜日のお祭り騒ぎの光景です」。そう言うと、その社会学者は歯ぎしりしていました。

(一九〇九年六月二十日)

ラマルク(1)の祭典は、芸術が屢々学問に先行していることを私に考えさせました。何故なら、学者たちが種の永続性という理念を宗教のようなもののように教えていた時代に、馬や犬や牛や鶏の飼育者たちが必要としていた動物を適切に育て上げる術を覚えるには、既に何世紀もの多くの時間をかけて来たからです。

その間に教授たちは、良く知っているリフレインを繰り返し言って来たのです。生活の決まりは神秘的で、あらゆる生物は現在のメカニズムを変える機構に従って、計画とか一定の型を実現させ、農民は雄馬や雌馬の中から最も丈夫な馬とか最も速い馬を選んで、競争馬とか犁を引く馬を好きなように生産しました。密猟監視人はそれで犬を生産し、同じ体付き、同じ毛の長さ、同じ色、同じ斑点が鼻や目の上にある犬を養犬場で保存して置くことに専念しました。従って、彼は自分自身を犬に合わせて生きている、と誇張しないで言えるのでした。他の人々は、殆ど骨のない牛を誇らしげに示し、既に焼肉になっているのでした。その結果人間の産業は生まれ、動物の形を変えるとか抑制する法則とかいうものに関して最も学識ある人間が間違っ理解する前に、動物の種属は決定されていました。

そのことは、知識があることと覚えることを良く示しています。言葉でない知識と、殆ど思考のない知識があり、それは行為を伴いません。飼育者は遺伝の法則と選択の結果を知りますので、その選択を適用して成功します。少なくとも彼は、そのことを決して思考しません。彼の注意は、全て選択しなければならない動物に注がれます。驚く程、子馬や犬のことを知っています。低地の牧草地では馬の蹄を悪くして、先端で歩くので、尻の形が変形すると説明することもあります。しかし、そこまでの中間の行動とか、生物の種属を変えることが出来る意志的な淘汰までは自問しません。

彼は疑問を持ちません。まさしく実用がしみ込んでいるからです。同様に、石工は槌子の使い方を覚えますし、それらを何処で使うかを知っています。まさしくそのためにそこでは決して考えません。行為は思考を眠らせます。あるいは、寧ろ細部までその効果が決定されています。思考は穿鑿好きで、散歩をする女性です。彼女は贅沢でなければなりません、あるいは全てが元の木阿弥です。パイロットは星や月や太陽を利用しますが、決して単なる好奇心に駆られて思考しません。それが出来ないのです。彼にとって事物は興味で一杯です。彼は星のことに詳しく、嵐や港や女性や子供たちのことを知っています。同じ様に飼育者は、肉牛のダラム牛からお金を儲けることしか理解しません。以上が、職業は学問にとっての悪しき教師である理由であり、それらの行為の方法がより確実なだけにそれだけ益々悪いものになります。もしもダーウィンが鳩の商人であったなら、恐らくその洞察力と共に直ぐにでもお金持ちになっていたことでしょう。しかし彼は素人であって職業で行ったのではありませんでしたし、好奇心から鳩を育てていました。そのことは職業教育が教育でないことが良く分かります。出来るということは知ることはありません。

(1) ラマルク (一七四四～一八二九) は、無脊椎動物の研究から、ダーウィンに先立って進化思想の基盤を築いた博物学者。

私は、バレス（1）のサインを偶然に見付けました。彼は若者で、大変に才能があり、そして考える輩そのものに見えます。平らな髪型が眼の方へ下がっていて、頭の天辺から出ているように大声です。彼はマノエル・ド・ソブレロと呼ばれていますが、フランス人には良くある名前で、ロレーヌ地方に乳兄弟がいます。

彼は何時も同じ言葉を私に投げつけました。彼は言います、「あなたの一般的〈理性〉は弱い光で私を照らしますが、決して私を育ててくれません。その抽象的な規範は私の心を何も感動させません。あなたの穏健な愛国的共和主義のジャコバン主義よりも、私にはもっと刺激的な教義がなければなりません。更に、もしあなたが政治上の断頭台を持っていたなら、恐らくその激しい行動が私を引っ張って行ったことでしょう。しかし、あなたは決して頭を切断しません。もっと正確に言うなら、あなたは頭を切断して考えるのです、腕のない頭のように、胸もなければ根もありません。ところが私は体全体で思考したいのです。こうした訳で私は大地に祖先の足跡を探しながら、そして石で出来た本を読みながら、ロレーヌ地方の運営に戻ります。そして同様に、私は腕や足や心を持った政治を望みます。過去を未来に結びつける政治です。子供の観念であるような、最初は本能的で直感的な政治です。しかしジャコバン主義のあなたは神童のように話します。あなたの主義は正確と冷静であり、バカロレア資格者の幾何学のようにです。結局のところあなたは二つに分断させられます。革命的なキリスト教を語っている間に、あなたの本能は手探りで動き出し、まるで卑しい動物のようです。そこには優雅さのない腐敗があり、時間潰しの下らない論争があります。そのことによって、あなたの〈共和制〉も根絶させられると思います。私は王党派を愛しています、何故なら信仰があるからです」。

私は彼に言いました、「私はあなたが行為に信仰を見出しているのを良く分かっています。それというのも、あなたの眼の周りには黒いあざがあるからです。しかし実のところ、あなたは新聞や議会に従ってパリジャンとして判断しています。もしも人民にもっと近付いて生活したなら、一般的〈理性〉とは私たちの裡では本能であるとあなたは分かるでしょう。〈革命〉はイデオロギーとは別物であるということの良い信じて下さい。そして、それを証明することが革命に勝利したことになるのです。あなたはフランスの伝統を求めています。よろしい、私はそれに同意します。現実の中にそれを探しましょう。王たちが地面に投げ出されたのは一度ではありません。〈共和国〉も現実です。それは君主制が根絶させられることです。あなたのモーラス（2）は空想家です。もしもドレフュス派の人々が冷静な倫理の教授たちであったなら、ドレフュスは再び悪魔島にいることになるでしょう。参謀部の将校、金持ち、特権者、職務上の君主制擁護者を解放するために、社会主義者やフリーメーソン団員や一八四八年の二月革命の老いぼれ革命家たちを駆り立てることが出来る関心は、どんなにか程度が低かったか、あなたは私に言いたいのですか。私たちの精神的な幾何学は根を張らない訳ではありませんが、大衆を取り除いたのです。赤い野薔薇を付けてロンシャンへ行った十万人の社会主義者たちは、権利と正義の意味を良く知りませんでした。それは彼らの中では宗教のようなものであり、彼らの胸の中は先人たちの革命

のようなものであり、燃える炎のようなものでした。圧政に苦しむ人々にも子供たちがいました。原理原則は腕であり足です。あなたの眼の周りに黒いあざを作ったのは抽象的な観念ではないのです」。

(一九〇九年六月二四日)

(1) モーリス・バレス (一八六二～一九二三) は、国家主義へ向かった作家・政治家。

(2) シャルル・モーラス (一八六八～一九五二) は、「アクション・フランセーズ」紙の中心人物で王党派、反民主派の姿勢を取った作家。

〈船舶〉についての議会による調査は、今日まで結論が出ていないものでした。しかし、共和制に根を下ろした考えというものが徐々に世論の中に出て来たようで、代議士たちもだんだんと自分たちの義務のことを考えざるを得なくなって来ております。今度は官僚たちが報告する代わりに、もっと多くのお金を手に入れるために如何に熱中しているか、私たちは自問しました。彼らが抜け目ないことを私は今では良く分かっています。

彼らは戦艦から魚雷艇へ大変に早く委員会の意見を移しながら、委員会を疲弊させることから始めました。一人ひとりが自分の仕事を生き生きと先見の明を持っているのと同じ程度に、最も迅速な精神は隣人の仕事も模索します。私としては全く慣れないことが重要となるや否や、非常にゆっくりと行うことしかしっかりとした観察は出来ません。最初の知覚は壁のように不透明で、私の注意力は役に立たず、そこにぶつかります。瓶の中の蠅に似ています。

もしも私が良く見たいなら、自分に何かの幻想を与えなければなりません。大変に異なった対象には休息して、前もって緊張した一連の観念に従うのではなくて、反対にそれを砕いて空気と自由を中に入れなければなりません。それは私だけが持っていた或る種の欠陥で、一分間は注意力を遣い、殆ど呼吸するのと同じ位に休息することである、と私は長い間信じていました。しかしそこには反対に共通の法則があつて、休みなく働く人々は利益がなくても、働く人々であるのを私は理解することが出来ました。

自分の視線を固定させて大空の一部を見るよりも、横目で見た星々の方が沢山見えるのを人は気付きました。この単純な事象は、眼の中央部分が受ける過労によって大変に良く説明しているのですが、沢山の学習にも当て嵌まります。要するに監視員は、もう少しのりくらしして横目で見なければならなかったのです。対象の周りをゆっくりと回って何度も同じ質問に戻ることで、と私は言いたいのです。しかし、悪賢い官僚は何時も何か新しいものを見せたり、新しい事を言ったりしていました。その委員会は急いでいました。今勉強している生徒は、今年は何も出来ずに出頭命令が来るのが殆ど分かるようなものです。その結果なのです。監視員たちは美術館を訪問する旅行者の一群のように海軍工廠を訪ねて終わりにしました。道路は造られ、理解して消化しにくい講義を百回も聞きました。二十通りの潜水艦の型が今、彼らの脳の中を駆け巡って闘っています。望ましいものがその中から生まれるのでしょうか。

しかし、情熱は空回りします。しかしながら批判し、告発し、懲戒しなければなりません。官房長たちによる驚嘆すべき訴訟が持ち上がったのはその時です。それ故に注意を払うことです。彼らは自分の家に書類を持って行きました。自分の家に公文書があるのです。しかし、どんな書類かあなたは言わないのでしょうか。それはまさしく、見なければならなかったものです。その時、問題の書類を整理することが予審判事の一司法官に任せられました。委員会にそれらのことが伝えられる前に、一寸したことが中々承知されません。辛辣な手紙と刺激的な辛い話が表に出ました。波瀾が起こり、決闘のようなことがなければ終わらないでしょう。その間に、誰もが興奮から冷めて、それらの不明朗会計は闇の中へ消えて行きます。誰も大砲をテストし

ません。誰も砲弾の数を数えません。

(一九〇九年六月二九日)

四十 (言論の自由)

実のところ、不公平と評価される法律に従う必要は何もないと公然と説く司教(1)を熱心に求めることは、余り合理的なことではありません。要するにそれは、その時点でのみ支持出来る意見なのです。それは精神に最初に来るもので、人はその時、公平と不公平について考えます。私が引き抜くと惜しいと思う大変に美しい植物を、引き抜くことを考えるのと同じです。

権力は決して正しくありません。権力は何処にあるか、出来事が分からせてくれますが、正しい処にありません。既に自分では分かっているかの如くしている大胆な独裁者を仮定して下さい。彼は相当な浪費を約束して、自分の周りに人々を集める術を知っています。飢えて痩せている人々、山師たち、恐れを知らない野心家たちばかりです。有権者たちは騙されているか、恐怖にさせているか、墮落させていると仮定してみましよう。投票箱が二重底で、銃剣の矛先で開票が行われると仮定してみましよう。その国には或る種の法律がその時あるに違いありません。例えばユダヤ人を追放するとか、知事による検閲のために全てのニュースを提出させて、言論の息の根を止めていると仮定してみましよう。そのような制度が十年間とか二十年間行われて来た時、市民たちを纏めているのは無知の結果によるものです。ついには最も多くの人に受け入れられている時でも、その制度は合理的な人間の尊厳にとって何時も権利が最も弱くなるものでもないでしょう。実際に人は我慢して従うのでしようが、意志はその儘残ります。権利にしか責任を負わない内面の信仰は、権力に降伏するのを拒否します。そして、もしも或る禁欲主義者が自分の肉体を強ばらせて、不公平を公平と認めるよりも寧ろ投獄される儘になったなら、それは美しい光景になるでしょう。

その様なことは、私たちの全ての義務の根本です。私たちは一人ひとりが自分自身の理性的な部分に向かって要約されます。一人ひとりが真実に従って行動しなければなりません。隣人の真実ではありません。自分の真実に従って行動しなければなりません。しかし、真実と虚偽は窺い知れないとあなたは言います。勿論、真実と間違いはまさしく一人ひとりが判断するのです。思考しない人間は、やむを得ない限りはもったもであるにしても、最早人間ではありません。私は、自分が見付けた真実を曲解したり軽視する者よりも、真実と信じたが虚偽であったために自分を殺す者の方が好きです。もしもこの司教が誠実であったなら(そうでないのなら如何に証明するかです)、前進するためにフリーメーソン団員になる聖職者支持者よりも百倍も値打ちがあります。要するに盲目の美德は、美德のない科学よりも、この世にとっては貴重なのです。

しかし熱狂的なものに反対して、私たちを守ることが秩序にはなくてはなりません。それ故にデルレード(2)がエリゼ宮軍を動かし始めた後では、国外へ追放しなければならなかったのです。何故なら、共和制という制度は、自由を好きになって欲しいからです。もしも言論の自由が無くなったなら、その時は〈共和制〉の名の下に変装した〈専制君主制〉しかないことになるでしょう。それ故に話は自由にさせて置きましょう。そして良識を当てにしましょう。

(一九〇九年七月四日)

(1) ジェール県オーシュの大司教リカールは、彼によれば無宗教学校では〈反キリスト教・反愛国的〉教育が行われていると教書で公然と批判したことにより、五百フランの罰金を宣告されていた。

(2) ポール・デルレード（一八四六～一九一四）は、一八九九年二月二三日のフォール大統領（一八四一～九九）の葬儀に際して、エリゼ宮付きの軍隊を騙しクーデターを企てたことで国外追放された（一九〇〇～五）政治家・作家であり、愛国者同盟の創設者でもある。

（次章へ続く）

十二人程の鉄道員たちが〈金持ち〉の代表者の家で自己紹介をしました。彼は老人で、統計上は慈善家に入り、倫理学のアカデミー会員でした。彼は、暖炉を背にして彼らの自己紹介を上品に心から聞きました。一人の老いた転轍手は次のことを話しました。

「あなたがおっしゃったように私たちはあなた方〈金持ち〉と共に社会を形成しています。私たちはお金を稼ぎ、そしてあなた方はそれを使います。よろしい、それは周知のことです。私たちは労働が厭ではありません。私たちは大変に気に入られているとさえ言えるでしょう。両手で生むのは何でしょうか。それは誰かに返す義務は何もないということです。あなたに言うのですが、要するに私はあなたと一緒に変わらないでしょう。少なくともあなた方は、私たちを五十歳で退職させなければならなかったのです。どんな風にしてあなた方が生活しているか、私は知っています。その生活があなた方を破滅させることはないでしょう。舞踏会を二つ開くことはなく、そのうちの一つにするでしょう。あなた方の奥様は、毎月新しい帽子を買いますが、毎週買うことはしません。あなた方はサロン式特等車に乗らずに、一等車で方々旅するのでしょうか。食卓の給仕をする人が二人いる代わりに、従僕が一人あなたにはいるでしょう。そしてあなたの真珠のネックレスが一連少なくなるだけでしょう。あなたの生活は殆ど変わらないでしょう。私たちは五十歳での退職金が六百フランですが、それに対してあなた方は天国です。それ故に、あなた方が言っていたように私たちがいくら望んでも、何も始まりません。ですから私たちは要求するのです。さもないと私たちは怒りが収まりません。以上です」。

金持ちの代表は答えました、「友よ、あなたは金持ちに厳しい。それでも私のように書物に生きているお人好しの老人は、従僕の経費を削ることも十分出来ます。しかし、あなたはこういう金持ちをご存知ありません。あなたは、毎日十二時間働かせる人間として、彼ら金持ちを見ています。あなたは真珠のネックレスが一連少なくなったことを話します。あなたは喜びを削っているのです。しかし友よ、喜びとは金持ちの血であり肉です。彼らにはそれしかないのです。そのことしか考えません。私には娘たちがおります。婿もおります。友人もおります。もしも私が彼らへの出費を少なくすることや、気に入った四十頭目の馬とかロシアオペラのボックス席を自分に禁じることを話したなら、私を気が狂った老人と見るでしょう。あなた方は美しく盛装した女性のことしかご存知ないのです。あなた方は、彼女から喜びを奪いたくなる者の心や考えを彼女が何時か追撃しようとする、どんな視線も想像しません。その代わりに、それ以上に大きな喜びを与える者もおりません。あるいは破れたブーツを上手に履いて優雅に馬に乗っている人に文句を言うか、季節外れのモーニング・コートを着てギャロップで走るのに文句を言うことです。あなた方は人の冷たい視線をその時見ますし、あなた方は話す言葉を中断させることでしょう。そうです、あなた方は金持ちの知り合いがないのです。私はそのことを良く知っています。私はあなた方に言いますが、彼ら男や女たちを殺さなければならないのでしょうか。そうです、本当に彼らは死ぬまで闘いでしょうが、それは自分たちの喜びのためです。しかし、あなた方は空気や光を生んでいるかの如くです。その時のあなた方には同情も無いのですから、それ故に殴りな

さい」。

鉄道員たちは顔を見合わせて、次のように言いたいかのようにでした。「彼らを殺さねばならないなら、私たちは今の儘でいよう」。彼らは道具を手にして働くために、その方向に向かって既に引き揚げて行きました。

(一九〇九年七月五日)

四十二 代議士と有権者 (DÉPUTE ET L'ÉLECTEUR)

私が既に何度も言ってきたことの繰り返しになりますが、選挙改革の話に戻ります。何故ならその点について議論する人々は、本当の問題に触れていると私には決して思えないからです。

郡の選挙投票に対して多くの論者が言っていることは良く知られています。それは月並みな意見になっています。代議士は選挙の奴隷であると言われていています。でも、その中であなたは何にぞっとしますか。あなたは、自由に投票する代議士が好きになりませんか。この代議士が賢明で理性的で人々が望む公平を持っているとしても、私としては何事にも穏やかでいられません。私は、理論や原則を無視することはありません。まさにその反対です。少なくともあらゆる芸術や建築や農業や医学のように、それは政治的になるものです。観念を現実に応用させなければなりません。

政治的現実とはどんなものでしょうか。それは市民であり、職業であり、商業です。つまり一個人の利益です。全体の利益や危機や全体的混乱や世論のことが良く話されますが、それらは抽象的観念です。実際の世論は、個人的意見で構成されます。〈善きフランス人たち〉という名の下で、気儘な政治によって多くのことが行われて来ました。これらの善きフランス人たちが、国家権力を引き寄せることが出来るのは私の喜びです。市民が〈自分の代議士〉に言いに来るのも、私の喜びです。「新税制に賛成するのがあなたの喜びでした。私は二百フラン以上を納税しています」。

代議士は、これらのお喋りを聞くには時間をすり減らすことになると言うのでしょうか。でも、あなたは自分の時間を何に使いたいのですか。代議士とは市民の意見を国家権力にまで持って行く人間である、と私の眼には見えます。市民を良く知れば知る程、彼らに支配されます。政府への質問とか投票は、空想的な意見、派閥の意見、工場にいる義兄とか軍隊にいる娘婿あるいは官僚の甥の意見でさえも反映しないのは確かであると私は思います。

政党の教義があり、政党の決定があることを私は知っています。しかしこれらの教義や決定が、まさしく市民の意見にぴったり合っていないとしたなら、私たちには何の保証があるのでしょうか。私たちは小さな幸せに支配されるのでしょうか。演説者の決まり切った意見に従うのでしょうか。その次には専門家の奇抜さに従うのでしょうか。その次はジャーナリストの空想力です。全てが愛好家であり、その精神にはバラストとなる底荷や根っ子がなく、彼らは余り危険を冒しません。実際に働く者とは、炭焼き人であり、パン屋であり、石工です。要するに、法律が作られて、それらを守る人々に修正される時には全てが上手く行きます。最悪なのは空想力によって立法する者です。彼は他人の幸福に手を出します。

私は先日、次の有名な言葉が引用されていたのを見ました。「あなたの選挙区を考えなさい」。これが口にされていたのは、最も卑しい言葉として引用されていました。明らかにその言葉は崇高ではありません。しかし、私は政治に崇高なるものを信用しません。何故なら、その費用を払うのは市民であるからです。そうです、代議士たちは自分の選挙区のことを考えなければなりません。そして、まさしく彼らはロビーでの話を大変に長く聞いた後で真剣に考えたから、修正

が行われたのです。それらの政党が、ドレフュスを悪魔島（1）に置き忘れていたのでしょう。

（一九〇九年七月十二日）

（1）一八九四年のドレフュス事件で、ユダヤ人のアルフレッド・ドレフュス大尉は冤罪にも拘わらず軍法会議で終身流刑の判決を受け、仏領ギアナの悪魔島に収監された（一八九五～九九）。当時のフランス国内をドレフュス派・反ドレフュス派に二分する大論争となった。

四十三 (決闘)

軍隊には、剣によるルールに従った決闘で、あらゆる暴力沙汰を決着する伝統があります。この習慣は、やたらと人を殴る者たちを反省させるには良いものです。人間が戦争行為の訓練を受けている時、翌日の戦いに再び参加する義務を負うのは悪くありませんが、自分の意志で参加することは危険がはっきりと見て取れます。力を使った者が力しかないと良く分かるのは良いことです。彼が他者と剣を交えた時、慎重さと器用さだけで相手の剣先から身を守るのを理解した時、平和が一番良いものとその真価を彼が認めるのを私は想像します。

それは決闘を考察しなければならない立場に属します。その時そこに古代の野蛮な時代の思い出や儀式とは別のものを見ることでしょう。決闘は決して野蛮なものではないように見えると私は敢えて言います。その反対に決闘は余りに血の気の多い人々にとっての一種の学習です。口論しているうちに動物のようになって口出しする瞬間が来ます。彼は噛むようになり、人を中傷するようになります。彼を鎖で繋ぎなさい。あなたは彼をもっと怒らせることしかやらないでしょう。そこから待ち伏せや殴り合いの復讐が続いて行われます。その時は名誉ある法規や規範が口を出す時です。上手に毅然となる時です。

名誉ある審判者が言いました、「何ですか。あなたは苦痛を恐れず、あなたを侮辱するのは危険であることを証明したいのですか。よろしい、私に任せて置きなさい。私はもっと非常に恐ろしい闘いをあなたに用意するでしょう。それはあなたが殴ることではなく、彼の腹に弾丸を撃ち込むことです」。

怒りは、これらの恐ろしいイメージで満足して、殴り合いを中断させます。公平な受託者たちはその時、事態を検証し、誤解を説明し、間違っ理解された言葉や曖昧な行為を解釈する必要がある時間を同様に持つようになれば、本能的な残酷さは驚くべきことに既に十分に鎮まっているのです。

それらの目撃者たちが討議している間、相手側も必ず有益な思考を行うことができます。急を要する危険なことを人々は殆ど考えません。余りに行動に捕らわれています。もしもあなたが彼らを二分間武装させて一列に並ばせたなら、丁度彼らが拳を握ろうとした時にも、残酷な人間が何時も二人いたことでしょう。しかし、思考と行動の間に二十四時間流れていたなら、悪口や復讐をより正しく吟味しない訳にはいきません。必然的に彼らはピストルの一発とか剣の一撃の結果を前もって想像します。彼らは相手側が死に値するとはめったに考えなくなるでしょう。可能な限りの悪が及べば良いとはめったに望まないでしょう。いずれにせよ、彼らは何を望むかを知るでしょう。十回のうち九回は行儀良く望むしかないでしょう。他人を殺すことなどありません。殴り合いには反対です。望むことを良く知りませんし、行うことも知りません。

相手側の一人が、実際に他人を殺したい場合があります。既にこの場合、決闘は殴り合いよりも危険ではありません。もしも誰かが私をあの世へ送ることを誓ったなら、私が望めることの最善は、証人たちを前にして彼も人生を彼自身で危険を冒しながらも、所謂日付どおりにこの活動を行おうとしてくれることです。それ故に弾丸のやり取りも、私には馬鹿げたことに思えません

(一九〇九年七月十三日)

四十四 (金持ちの快樂)

友人のジャックが私に言いました、「金持ちたちは厄介だ。彼らは所得税案に反対して騒いでいる。実際は私たちに感謝しなければならないのだ。民主主義は意地悪じゃない。要するに金利生活者たちは、少なくとも収税史の助手に任命されているようなものだ。賃貸住宅を持つ者は借家人に家賃を支払わせるだろう。ラシャ地の製造工場を持つ者は商店へ配送する製品の税金を計算するだろう。私の新品の上着のポケットには請求書がある。同様に製鉄業者はフライパン、犁、斧、ナイフを作ることになるだろう。大手の製造業者たちは皆同じ条件になるだろうから、競争は何も生まないだろう。そうだ、叫んでいるのは金持ちたちであり、お金を支払うのは哀れなこのジャックなのだ」。

彼はパイプに再び火を付けてから言いました、「そうだ、実際に民主主義は意地悪ではない。民主主義は、贅沢や楽しみとなっている金持ちたちの本当の特権に手を付けない儘になっているのだ。急行列車よりも速い大型の自動車については、地上を押し潰すことはないにしても、国王税を取ることが出来ないのだろうか。何故なら道路を我が物顔で占領したり、歩行者の鼻先に埃を立てるかと思うと同時に石油の臭いを放つのは国王の特権のようでもあるからだ。もしもそれと公平であるのを望むなら、非常に乗車賃の高いサロン式特等車や寝台車の動く宮殿のような贅沢な列車でなければならないだろう。そして町々にあるその宮殿の庭では、庭園管理人たちがやることなく退屈している。その間に幼い子供たちは道で泥遊びが出来るのだ。そして壁で囲まれた公園、金網を張った狩猟場、豪華な馬、群れをなした猟犬、制服姿の従僕たちもいる。舞踊会や観劇や宝石や帽子もある。金持ちたちの快樂を禁じることが言われているが、税金は殆ど役に立たないだろう。あゝ、あなたは女性たちがダンス無しで済ませるかどうかわかりだ」。

彼は続けて言いました、「そして次にダンスをしたり、イルミネーションを照らして身を飾り、ビアリッツからオーステンデへ、オーステンデからニースへ保養地を大急ぎで旅行するのを禁じるなら、少しは皆が得をするだろうか。それというのも結局、それらの快樂は労働する人の日々をむさぼり食っているのである。それ故に分配するのに有益な生産は、極めて少ない儘である。ところが哀れなジャックを騙すためにお金を払う金持ちたちは、贅沢は労働者を生活させるものであると繰り返し私たちに言っているのだ。そして私たちはそう信じるか、少なくともそれが真実であるかの如く行動している。いいえ、そうではなくて、国民は意地悪ではない。きれいに着飾った娘たちが通るのを見るために、そして精錬され、ヤスリを掛けられ、ニスが塗られ、エンジンが調整されて唸りを上げる自動車を通るのを見るために、国民は首を伸ばしている。大祝典の日々の窓辺には踊る人影が見えるが、決して部屋の中へ這入りたいと言っていない。しかし踊るのは国民の仕事であり、ヴァイオリンのお金を支払うのも国民なのだ」。

(一九〇九年七月十五日)

四十五 変わりやすい意見 (OPINIONS CHANGEANTES)

少しは知的になろうとして、一つの思想、複数の思想、出来る限りの全ての思想、好きな時に実現可能な意見を持つことは容易です。私は、概論を読みながら幾何学を理解するように、政治の概論を読みながら政治を理解することが出来ます。保持する教義に膠着することは知性の欠点です。何故なら教義というものはお互いに関連しているからです。従って胃に問題がない限り、精神が思考するために思考する限り、本の頁を捲るように他人の意見は過去のものになります。化学の本を読みなさい。あなたはやがて原子に賛成するでしょう。あるいはその反対に、あなたが考えることに従うでしょう。それ故に意見が変わっても私は決して驚きません。関心が知性のために変わっても十分です。出て行ったお客のことは忘れませんが、這って来たお客は全てが弁護士に似て来ます。強い関心とか、代議士になる欲望とか、ジャーナリストになる必要性が、完全な社会主義へ私を追いやると仮定してみましよう。私の知性は抵抗している、とあなたは信じるでしょうか。その質問は殆ど質問になっていません。私は、群を成してやって来る正しい理性を理解します。私は大変上手に悪人を避けることが出来るでしょう。

精神のこの容易さが、恐らく私を政治的活動へ向かわせたのです。私に情熱が無い訳ではありません。私は如何なる圧制にも反対で、非常に怒りを感じます。そして私の政治的意見が一杯になりますが、それで十分です。しかし、もしも野心とか支配する喜びのような他の感情があったなら、それが混じり合って変化することも十分あり得ます。しかも大変早くそうなるでしょう。

それでは重りは何処にあるのでしょうか。関心の中です。確信は素早く作られます。いわば今日の職務によって書き取られますが、私は多く関係していません。大臣は統治したがりですが、それは全く自然です。そこには決して意見がなく、習慣に従うだけです。政治的な指針は、もしも別の力と決して結びつかなければ、夢中になることなのでしょうか。いいえ、そうではなくて、私が思想と呼ぶもの、生き生きとした本当の思想、生活全体の骨格になる思想は、土地も入っている混合ですが、体の中では目立たない機能です。私の好みで言うと、思考する人とは多くのことに愛着を抱く人間です。売ったり買ったりしますが損益を考慮して、一方を評価すれば他方を非難します。何故なら、あらゆることに駆け引きをする動きは少なく、自分なりの沢山の方法で心を動かしているからです。その時、彼の思想はゆっくりと動き回りますが、体全体を引っ張っているのです。沢山の事物も一緒です。彼には一の中に千の観念があります。一の中に全ての観念があり、強く結ばれています。実際の思想がそこにはあります。大地を耕す力強い思想です。グランデ爺さんの吝嗇は、教授の倫理学の講座よりも遙かに良く思考された何かです。公務員や教授やジャーナリストや作家たちは、ステュクス(1)の河岸の影です。彼らが待っている思想は、本当に彼らの犠牲を余り払ったものではありません。私は、彼らが幾ら上手に話しても感動しません。言葉が心を動かす程重くないのです。世界は心を動かす程に重く、そして良いものは沢山あります。もしも機関車がそんなにも重くなかったなら、何も引っ張れないでしょう。

(一九〇九年八月五日)

(1) ステュクスは、冥界を七巻にして流れるギリシア神話上の河。

四十六 好機 (LA CHANCE)

或る人が、近頃非常に注目されている政治家のことを話しながら、昨日私に言いました、「私は彼を選ぶでしょう。何故なら彼には好機があるからだ」。或る夫人が更に言いました、「何故ですか。あなたは幸運や不運を信じるのですか」。別の人が答えました、「皆信じていますよ」。この答えに皆が沈黙しました。それから別の話題になりました。

私たちはこれらの当惑した感情を大変に早く気にしなくなります。それらを体験して顔を赤くします。何故ならそれらの感情は、一般的に形式がおかしな提案でも、それに合わせて一致させて仕舞うからです。或る数字を他の数字よりも好んだりするとか、或る馬の名前の頭文字を見て成功を判断したりすることは、明らかに間違った考えです。しかし騎手にはチャンスがあると信じることは、つまり他の沢山の馬に勝ったために賞を得ることを単純に信じることは、最早そんなにも愚かではありません。何故なら成功が信頼を与えていることを良く知っているからです。信頼は成功にとっても多くのものを与えるからです。もしもその騎手はその馬を信頼していたなら、その時はあなたも期待する素晴らしいレースが行われます。迷いはなくなり、長い距離の最後には勝利を手にします。時期尚早に馬を行かせないで、頑張つて我慢することが出来ます。その様にして動物における実力のゲームに逆らうのです。

私は同じことを政治家にも言います。もっと当然のこととして言います。何故なら先ず第一に、もしも成功することを信じるなら、多くの最善のものに精通して、その力を判断し、執拗になり、耐えて反論者に勝つのでしょう。しかしその上、ここでの馬は人間であるように、その人間たちは過去の成功の生き生きとした記憶を持っています。戦う者たちは、既に敗北のことを思っています。信頼の効果は戦いの中に自分を見ます。その中に全てがあります。そして成功は成功を引き付けますが、それは不可思議な方法ではありません。人間というメカニズム、つまり神経を通じた感情や記憶の働きによるものです。

予言の力や予感も同じやり方だと言えます。予言は、信じさえすれば原因になります。もしも私が綱渡り芸人は何時か転落するだろうと予言すれば、そして彼がそれを信じれば、転落することでしょう。転落するという観念が既に落下の始まりであることを、眩暈が良く分からせてくれます。しかし、その予言を信じる必要はありません。その予言を思考するだけで良いのです。そして、それに支配されるのではありません。寧ろ支配されるのは予言する私です。予言を言う言葉のアクセントや動作に支配されているのです。従つて予言をするには技術が必要です。魔法使いたちは、私たちの脳の中に精神的痕跡を残す術を知っている者たちなのです。

もしも悲劇であったならば、出来事は恐ろしい予言者です。私は一人の農民と知り合いになりましたが、彼は前年に父親が自殺した納屋の同じ地下室で、自殺し損ないました。私が回復中の彼に会った時、そんなことを何故やったのか、大変詳しく説明してくれました。「私は何も考えていなかった」と彼は言い、「私は熊手を持ってそこにいた。突然に私は、絞首台と同じ行動をとって首を吊った父を見たのだ。私はベッドの中で気付いたのである」。この様に恐ろしく意外な予測は、突然に私たちを恐怖でぞっとさせます。市内電車の運転手は、ブレーキをぎゅっと

握りしめます。決闘者は腕を突っ張ります。せめて物事を詳細に検討するなら、最早そんなことにはならないと思います。神々を信じるや否や、神々は現れて来ます。印や証拠が宗教には不可欠です。

(一九〇九年八月九日)

四十七 理工科学校生 (LE POLYTECHNICIEN)

私は或る日チュイルリー公園で、小股で少し躊躇いがちに歩き、今までに会ったことがない男が通り過ぎるのを見ました。彼は近眼です。眼鏡で物を見分けていました。彼の胸はそれに熱中になり過ぎて余りに狭くなっています。アカデミー・フランセーズ級の彼の頭は、記憶力と判断力の区別がつかない連中には、決して理解出来ないでしょう。彼の脳はあらゆる痕跡を受け入れて保存しているのであり、狂いがありません。

愛想笑いを浮かべている彼の顔は礼儀正しく、態度は慎み深いです。着ている服と着こなしは全てが子供っぽく、短い半ズボンをはいていて、襟には大きな白いカラーを付けています。幼稚園の教育を司教から教えて貰ったばかりのようでした。そのことは全てが、素直さと規則正しい勉強と礼儀正しくする注意力を物語っています。今では自然です。先生や読書やりせや一流校でも申し分なく信頼されており、一流校というのは、理工科学校です。

その男が、自分の本当の祖国を感じたのは数学です。何故なら問題を解く規則正しさは、礼儀の規則正しさに似ていたからです。代数は望まないものを思考するための機械です。私は第二の秩序を精神の裡に聞きます。集合体の見方をするのではなく、詳細を注意して見ます。数学には決して創意工夫がないのですから、数学は細心であり、既に官僚主義なのです。

内気な人は意欲もなく他人に立ち向かい、そして謝ります。彼は人生に一つのことしか望まなかった男です。幾つもの試験を受けて、そして免状を手に入れるように結婚した男です。優柔不断のことばかりです。全ての人に従い、何も見ない男です。試験問題のように全ての問題を引き受ける男です。軟石に水滴が落ちた時のように彼の中では、忠告は全てが一つの印になる男です。沢山の光に取り巻かれている男ですが、彼は最早それを見ません。あらゆるデータを自分の問題として受け取ります。ボーイが箒で掃く埃と同じです。

新しいものは全て寸法を非常に正確に測る男です。新しいものには全て非常に怖がって慎重になる男です。一つの関係に二つの関係を質問する男であり、夜中まで自分のものを訂正します。従ってそこで全てのバランスを取ります。敢えて署名しない男ですが、そんな時は読み直す時間を取ります。細心な上にも細心な男です。誠意はある男ですが、最悪を恐れて悪の共犯者にもなる男です。彼が署名する時は、他の連中は署名しないのを確信している男です。自分の身を守っている男なのです。長い時間をかけて躊躇いを解消し、油を差して調整した後で人を訪ねる男です。その彼に似た子供たちを育てている男ですが、彼としては一つの情熱である〈学校〉しか持っていません。一つの宗教である〈仲間意識〉しかありません。喜びは、教授や試験のことを話すことです。以上は、我が国で全てのことを管理している活動家のことです。

(一九〇九年八月十六日)

四十八 教育学、決定しないこと (PÉDAGOGIE: NE PAS DÉFINIR)

大変に合理的な老婦人と私は知り合いです、彼女は職業柄大変に良く知っている若い生徒たちを、勉強とその進歩で判断するようにしていました。奇妙なことにそれらの判断には、一貫したものが多くありません。彼女は昨日教えたことを毎日忘れるそうです。公平な精神を持った非常に真面目な或る教育者は、前日のことをその日に全く反対のものに結びつけたりするとやはり心配が伴いますが、精神のこの拘りのなさには感嘆するのです。その教育者は言いました、「このお年寄りには何という青春があるのだろうか。それに反して私たちの見解は地を這い、過去の思い出で一杯で、愚行が何時も生まれているかのようです。彼女は事物からの衝撃に応えることよりも、彼女自身の儘でいても心配していないのは明白です。かつそれは強力です。何故なら、一度裏切られたとしても、その時には間違いを引きずらないでいるからです」。

その指摘は正しかったのですが、結局のところ彼女ははっきりさせませんでした。私たちは絶えず沢山の賞を望んでいます。何故なら約束を交わした人に賞を見せたいからです。大臣が非常に早く意見を変えるのを私が余り喜ばないのも、そのためです。私の安全が重要なのもその時です。恐らく政治的人間には、少しは重々しい精神がなければなりません。職務とは、主として思考することではないということです。その上、行為は思考を狭くしますが、それで十分に良いのです。思考に翼があるのは、少なくとも真実ではありません。良く理解するには、忘れることも覚えなければなりません。

そこには伸びる性質があります。毎朝、あなたは新しい発芽を見ることでしょう。昨日真実であったことは、今日はもう既に真実ではありません。もっと正確に言うなら、その時はもっと奥深い所を把握しなければならないのでしょうか。でも如何にやれば良いのでしょうか。子供たちは殆ど何時も模倣します。日々の違いすら分かりません。極端な臆病は、殆ど何時も麻痺させ停滞させます。私たちは彼らの言葉や行動をもとに押し潰すのでしょうか。それは良いことなのでしょうか。悪いことなのでしょうか。愚かなことなのでしょうか。気を付けて下さい。あなたの全ての停止は壊されるでしょう。決して花の咲かない棘しか生えない馬鹿者がここにあります。晴れた朝に太陽を浴びることが何であるか知りません。でもこの自然が花を咲かせて知性的になるのであり、あるいは忠実さを生みます。私たちが教育してくれるようになったのは遅まきの春です。そのことを良く考えて下さい。子供たちの園芸家になるのはあなたです。今日生まれる善に反対して、昨日生まれた悪を育てないで下さい。「この子は心が冷たく、あの子は才気がある」と言うのは止めましょう。取分け、子供たちにそのことを言うのは止めましょう。そしてそのことを考えないように訓練しましょう。というのも言葉よりもはっきり分かる視線があるからです。子供たちの性質を決めつけて私たちの定義の中に閉じ込めないようにしましょう。本当に許すこととは、忘れてやることです。

(一九〇九年八月二日)

四十九 飛行機と女 (L'AÉROPLANE ET LA BONNE FEMME)

富裕者たちの横暴さは至る所で私たちを責め立てます。自動車は貧しい者たちを追い出し、死の咎を受けることにもなって、路上で唸る音を上げています。略奪者の中世の騎士でも、これ程の注目を浴びる的になっていたか私には分かりません。でも尊重されていたに違いありません。自動車も尊重されたいのです。何故なら尊重とは注意力でしかないからです。あなたがふらふら散歩する者になって、放心したようにクラクションを無視して土手の上で避けるのを遅れても、自動車を尊重して急いで避けるようになります。判断する暇もありません。昔、血液に値段が付いていましたが、それは血液を尊重してその代金を支払う人への保証です。

私たちは花咲く小径に止まりますが、急いで行動しましょう。ここは直ぐに狩猟の時間になります。直ぐに鉛の粒が葉をどんどん鳴らします。周囲に警笛を鳴らしたら、エンジンが十分に暖まったので、ハンターは正体を現してくたくたになって義務を果たしたのだと思います。ヨーロッパやまうずらの雛をやたらと発砲します。あなたは経験豊富です。可能な場所に身を隠して下さい。甜菜の中で一斉射撃が行われた後で、私は夫人と男の子を見ました。彼らは草を引き抜き、ハンターの前方に敷き詰めて一斉射撃後に立ち上がります。傷はなく幸運でした。何が起きたか、あなたはお分かりになりますか。彼らは罵詈雑言を浴びたのです。甜菜畑の周辺で狩猟をしている時に、しゃがみ込んでいる場合ではないと彼らは怒鳴られたのです。彼らは当惑して立ち去りました。危うく撃たれる処だったのです。この怒りを理解しなければなりません。ハンターのために人間の獲物が集まるのは、気持ちの良いものではないということです。

ランスの祭りは、それとは違う喜びを与えてくれます。富裕者たちは、直ぐに空を飛び始めます。彼らは可能な場所に落下して、もしも私たちが彼らの足とか寧ろ翼を再び眼にするなら、私たちは相当の悪口を耳にするでしょう。それ故に飛んでいる男を待ち伏せして、森の中に隠れなければなりません。彼らが降りない時でさえも、私たちの多くのものに砲弾を浴びせるでしょう。従って不平等はだんだんと目立って来ます。そのことは多分、不平等を止めさせるのに貢献します。他人のために財産を作って守ろうと使われる社会契約について、田舎の奥地までやむを得ず思考する哀れな人々は、彼ら自身のためにも不幸です。実際に富裕者たちは慎重さに欠けています。

鐘楼の周りを回っていた飛ぶ男を、その日の朝に見たと農民が言いに来た時、私もそこにいました。それはランス北郊にあるベトゥニーから来たグライダーのようでした。機体の調子をテストして、二十キロメートルとか三十キロメートル離れた所から来ていました。私たちは直ぐに現場へ行って上を向いていました。私も皆と一緒にでした。老女がお盆の上でアルファアルファを切っていました。彼女は言いました、「私は殆ど働かない。ランスの方を何時も見ているのは、そこから鳥たちがやって来るので待ち伏せするためです。私は非常に歳取っているが、そんなの見なかったとしても、それでも死なないことを願っています。楽しみがない人々がいます。でもそれは決して私ではありません」。そこには人間の真実の叫びがあります。そこには王のように立派であって、私たちの本質となる土台があります。私たちの力の源泉があり、人間的なるものの

秘密があり、善と悪があります。何故なら蟻や蜜蜂は恐らく収穫物や穀物倉しか見ないからです。しかしこの老女は草を切ることを忘れ、空飛ぶ男を待っていたのです。人間の両眼はあらゆるものに勝ちました。好奇心がこの世を支配しているのです。新しいものを見ることです。そして次に死ぬことです。それはアルキメデスの叫びです。草を拾い集める人は、どんな草を拾い集めても構わないのです。

(一九〇九年八月二六日)

五十 失業、贅沢、税金 (CHÔMAGE, LUXE, IMPÔT)

失業は、それ自体は悪業ではありません。悪業であるのは貧困です。機械による増産や牽引が行われて、既に生産が働きたい人々全員に行き渡らなくなっていることを失業は証明しています。日々の仕事の大部分は、何よりも先ず生活に必要なものを産むことよりも、別のものに使用されることを贅沢が教えてくれています。そこには二つの病巣があります。失業と贅沢です。二つは恐らくお互いに関連しています。もしも厳密に言って、食料、着物、住居のような必要なものを生産するために、全ての労働者が雇用されていたなら、全ての人々にとってこの種の生産が十分になった時にしか、失業は生じないでしょう。それは休息であり、暇な時間です。幸福でもあります。私は、失業には有害な原因しか理解しません。それは最悪の場合に、速い列車、自動車、家具、装飾用壁布、回廊、宮殿そしてこの種のもののようになくても良いものを作るかどうかです。気まぐれや流行やけちや虚栄心がここに 있습니다。そのうちに要求が変わります。製造業者たちは予想が付かない販売に期待します。彼らは高給で労働者を雇います。そして店は客で一杯になり、腕をこまねいているだけで良くなります。失業と贅沢は関係しています。言葉が少なくなっても、贅沢なものを求める客にはこと欠きません。

贅沢なものと必要なものとの境界を決定するのは、不可能であるのは全く本当です。いずれにせよ、やはりある意味で贅沢の行き過ぎは、いくつかの原因うちの一つになっています。極貧という殆ど唯一の原因になっていると言われていいます。

それ故に、実際の使い道を考慮しないで、財産を使うことは恐らく賢明ではありません。あなたは裕福なスパゲッティ製造業者を宝石製造業者のように交渉します。少し先見の明がありません。私の考えでは、それは節約にならないで、貯め込む財産になり害になります。けちんぼとは殆ど消費しない人間です。良く見ると彼の財産がお祭りの主催者の処に戻って来ない限り、その財産は共有の利益です。億万長者たちは、踊り子や劇場の支配人の手中に落ちません。蓄えたものを最後には、自然と私たちに返すようになります。何故なら人は食事を一度に二回も摂らないからです。とりあえず、それらの財産は増えて、生産が簡素化されます。皆がそこで少し得をします。

それ故に、増えた財産はその儘にして置かなければなりません。貯水池が一杯になったら、平原に流します。少なくとも贅沢に勝って労を惜しむべきではありません。何故なら、もしも富裕者たちが贅沢にお金を出したなら、公平になるからです。でももしも贅沢無しで済ませたなら、もっと公平になるからです。お金はどの道を通っても、何時も共有の宝に戻って来ます。しかしながら、その点については良く考えなければなりません。

(一九〇九年八月三十日)

(次章へ続く)

五十一 屁理屈屋の人々 (LES COUPEURS DE CHEVEUX EN QUATRE)

〈裕福島〉の住民たちは、怒り狂った蜜蜂のようにぶんぶん言っていました。曇った天気になると収穫が遅くなりました。何をしたら良いのか分からず、事態が急変して良くなることを求めました。彼らの領主は、自分独自の王国に捕らわれすぎた老君主で、口うるさい家臣たちから何らかの税を納めさせるのを長いこと放棄していました。しかしながら、彼の旗は塔にはためいていました。それ故に家臣たちは武器を磨いていました。彼ら持っている恩義とか片思いのことを考えていた人々、歳取ったことを酷く悔しがり二年以上は生きていたいと思っていた人々、怒りっぽい人々、ノイローゼになった人々、そして歯が痛い人々は現状が大きく変わって欲しいことに同意していました。彼らの中のその封建君主は自分が結んだ同盟に多くの不満を持っていました。そして予言者たちは、あらゆる国々との恐ろしい戦争を告げていました。

その時は、屁理屈屋の人々が仕事を始める時です。彼らは大変に悪賢い人々です。人々は非常に高いお金を支払っていました。尊敬すべき市民の多くの不安が十分証明しているのは、その不安の 때가屁理屈屋から来たことで、そのことを言っている時、屁理屈屋の一人が民衆の集会にやって来て長く大声で話しました。そして、その重要な仕事は良い結果を出さない限り、待つてより好戦的な結論で強固になること以外にやるべきことはない、ということでした。その上、無線が時々刻々と詳しいことを教えてくれます。彼らは屁理屈屋の人々を信頼するしかありませんでした。その能力も十分に分かっていました。市民たちは革命のシンボルである自分たちの縁なし帽子を空中に投げて、どんなものにも突進して、照明をつけました。

しかしながら、屁理屈屋の人々は拡大鏡と剃刀を持って集まりました。そして、あらゆる地方に電報を送りました。隅々まで連絡が行われていることは分かっていました。何故なら何時も物事はそのように行われていったからです。翌日、屁理屈屋の人々の中で最も高齢の男が開会の辞を述べましたが、やはり四時三十分はこの度の仕事は嘗てない程重要であり困難であることを言い、文明化された世界は希望に溢れ、歴史を振り返り、ついには間違いを犯すことが最早ないと言いました。この話はあらゆる言葉に翻訳されました。五段抜きの記事になり、ジャーナリストたちに大変好まれました。何故なら、アルコールが美味しい時間であったからです。

翌日から話題が少ない記事が載りました。しかしその重要性が強調される必要はありませんでした。屁理屈屋の一人は、剃刀のように切れる人の下にいたのです。そして翌日、その活動は大変に前進しました。三日目には、屁理屈屋は幾つかに分かれましたが、剃刀の人はその儘残りました。そのことは年金を下げ、母親たちは泣いていました。しかし、屁理屈屋の人々は決して驚きませんでした。何故なら諺にも言うように、良いことは全てが困難なのです。これらの驚異的な仕事から二週間後に、人々は三番目の困難に手を付け始めました。収穫物は熟し、実りの時期になりました。そのことは〈裕福島〉の住民は剣を置いて、鎌を急いで取りに行くのでした。ヨーロッパはやっとほっとして、屁理屈屋のリーダーは、レオンドヌール勲章の〈赤鷲〉の立派なりボンが授与されました。

(一九〇九年九月五日)

五十二 教会にとっての二つの声 (DEUX VOIES POUR L'ÉGLISE)

〈教会〉にとっては二つの声があります。シヨン運動家と、我が儘を叱るために立派な作家に少し姿を変えたりもする神学校の哲学者です。彼らは革命の源、つまり全く内面的な人間の意識に全てが自然と向かい、そこから公平な〈神〉へ行くのです。王や貴族や金持ちや権力者のためではありません。人間の価値は、貨幣が動物になく、本当の貨幣は人間のものであるように、言い方によっては、少なくとも人間の賢明さ次第です。つまり自分の情熱を自制する能力次第です。彼らは実際に自分が望んでいるイメージとか観念に従って死や空腹や寒さや恐怖に打ち勝った人間です。動物的な性質が混じったものを全て純化した精神の如く、人間的なものを識別する人間から彼らは何を生むのでしょうか。

この方法は大変に正しいものです。少なくとも、成功とか権力とかお金は悪を善に変える価値も美德もないという考えを持つや否や、それ故に人は善悪を判断するために泥沼から足を救い出します。今、持っている欲望や窮乏、大きくても小さくても今ついている嘘、あらゆる出世の方法そして腹の中の全てを忘れなければなりません。この抽象的観念は、大変に自然です。少なくとも哲学者は、一日に十回は行っていることです。「もしも私の判断が自由であったなら、何を望むだろうか。もしも恐怖がなく、空腹でなく、怠惰でなかったなら、何を望むだろうか」。これらの質問に答えることは、私にとっての義務を定めることであり、全ての人々にとっての権利を定めることです。そのことは次のように、自らに問うようになるのです。「もしも私が神であったなら、何を望むのであろうか」。

その様な情熱のない精神が存在するかどうかを知るための質問は、重要なものは沢山持っていないことに気付いて下さい。「もしも神が存在したなら、神は何を望むのだろうか」と私は心に言います。歳老いた主任司祭も心に言います、「生きている神は何を望んでいるのか」。言い方なのです。重要なことは答えです。それは〈権利〉という思想が重要なのです。それが何であろうと、あるいは今後も星の彼方とか想像上の楽園のような処でも、何処かで実現されなくても、人間の問題は何も変えられません。権利は私たちの近くにありませんが、存在するに違いありません。恐るべきエリコの角笛(1)は、死んで仕舞ったとしても全ての人々を何時も少し目覚めさせます。瞬間毎に最新の判断があります。

その他の道は偽善者のものです。彼は〈理性〉を馬鹿にして、不可解な夢想で神を隠蔽します。人間に命じられているかの如く、あるが儘の人間の状態を現実のものとして受け取ります。最早、悪魔のようなものは何もありません。敢えて神を非難し、存在すべきものを述べる人間の自覚が、彼の両眼に見えるだけです。この様にして美德が取り戻すものは服従であり、儀式を尊重することです。義務には手続きがあります。精神は殺されます。教義も眠っています。それは最もはっきりと眼に見える混乱や明白な義務を隠蔽します。それ故に、もしもあなたが王であったなら、王として行動して下さい。金持ちであったなら、金持ちとして行動して下さい。そして、神を裁いてはいけません。人に慣れないこの一般的でない教義にも、一種の真実があります。先ずは生きて、そして最も緊急の用件に取りかからねばなりません。折衷された正義に満足する

ことです。今持っている情熱で策を弄することです。悪魔も山の上で演説をしました。金持ちの饗宴には歌があります。そして哀れな人々の中の老人たちにも歌があります。教会が歌うのは、どちらか未だ分かりません。

「あなたは愚か者だ。教会はどちらの歌も歌うだろう」とル・R. P. フィアス(2)は私に言いました。

(一九〇九年九月十日)

(1) 旧約聖書「ヨシュア記」によると、エリコの町が占領される時、主はヨシュアに雄羊の角笛を吹き鳴らすと城壁が崩れると言った(第六章)。

(2) 第十五章参照

五十三 建築 (ARCHITECTURE)

新築の家屋は、自然の眺望の観点から調和を乱す厭なものであると一般に言われています。しかしながら、全ての小さな鐘楼風のホテルは美しくあって欲しいと思います。そして、それらのホテルを設計した建築家は傑作の研究をしても味を出していないと思うべきではありません。少なくとも建築家は実際に美を追究するや否や、美が逃れて行かざるを得ない人間である、と言うようになって仕舞います。

如何なる国においても、最も単純で貧相な家が最も美しい家でもあります。慣れた眼で見るとこの印象は上手く説明出来ません。というのも旅行者にとっては如何なる国の家も、新しい形や色をしているからです。ここに瓦や煉瓦があり、別の所には切石や藁葺きの家があります。山麓には瓦屋根の木造の山荘が見えます。その地方では、屋根は木材で造られています。もっと高地へ行くと、壁が石で造られているのが分かります。屋根は鉛色した片岩の板で造られています。もしも太陽のように降りて行ったなら、あなたは桑やアーモンドやオリーブの木を見ると同時に、乾いた岩で出来ていて、背が高く、薔薇色の屋根が平になっている家を見るでしょう。至る所ではっきりと分かるのは、それらの家々が色々なものと一緒に調和がとれていることです。

恐らくその様に見えるのは、家の中に土と石があるのを眼が見分けているからです。オリーブの木に囲まれた家々は、乾燥して固くなった道や段丘や山のように、乾いていて石だらけです。木造の家は、林間の空地に積まれた木材の山と同じ外観をしています。煉瓦は、火で固くした赤い粘土でしかありません。それらは数え切れない多くの色調の生みの親そのものです。あなたは魂にした事物を幾つも見せますが、それはどんな物でも容易に一つの物にして仕舞うやり方です。

形式としては同じものになります。各々の地方は雨や風や太陽によって、ずんぐりした家やすらりとした家、あるいは平らな屋根や尖った屋根、テラスや小さな鐘楼を造らせています。尖った屋根はノルマンディー地方では美しく、殆ど雨が降らない地方では平らな屋根です。山の中でも別な屋根があり、家々が寄り集まっています。それは水が雪になって降り、雪が屋根に残って家の暖かさを守っています。

家を建てる職人は、持っている資材を生かしているとも言わねばなりません。木彫の最初は多分、節をそれに当てて必要性を大事にしたのでしょう。職人は、節が多い美しい梁にして、板に切ったりしません。そして上手く組み立ててないかの如く、調和のとれている処まで回します。そこからは雄弁な不器用さが生まれ、〈必要性〉への敬意があります。ところがローマ時代のこの価値を、現代の私たちは無視しています。ルアンにはバルコニーが造られ、ディエップにはスイス式の別荘も造られています。レマン湖岸にはムーア様式の宮殿も造られるでしょう。描いたものがインクと紙にしか関わりがなかったなら、全ての美は失われます。ミケランジェロは、彼が見付けた大理石の塊によって彫像を思い付いたのです。

(一九〇九年九月十一日)

五十四 祖国 (LES PATRIES)

私たちが船で湖の向う岸へ行った時、私は憲兵たちを見ましたが、彼らは二角帽ではなく軍帽を被っていました。私は奇異な思いがして昔の姿を想像して思い出しておりました。何故なら、小さい時は誰でも憲兵の帽子には、何よりも大変注意を向けていたからです。突然に私は、自分を外国人のように思いました。そして、この印象から全ての奇異なことが、結晶するようにはっきりして来ました。ここにいるのは別の国民であると思いました。最早、同じ家、同じ庭、同じ収穫、同じ産業ではないのです。歩き振り、視線、動作、観念も同じではないのです。しかしながら私たちは水面を横切っていくばかりでした。それでも国境があり、国民がおります。この軍帽には沢山の意味合いがあります。

しかし私が眼を上げると、その光景は私の理性の働きを溺れさせました。そしてあらゆる奇異を生む父親のような太陽が、子供のようなこの思いを、そこからやって来た歴史の謎へ送り返しました。そこの北側には山々があり、既に秋の靄が立ちこめていました。それは葡萄の収穫期であることを教えていました。確かにそうです。そこには二種類の国民がおります。自分の葡萄畑のワインを飲む人は、どうして一リットルのワインを買う人らしく見せようとしたのでしょうか。その子供はあちこちでそれと同じ理由を大声で言いません。家の屋根は別な風に遮断されています。黄昏時には、同じ色彩、同じ影を決して見せません。火も、同じ火花がありません。何故なら燃えている木には、同じ木がないからです。そして私たちは、林檎の木が燃える時、柏のようにパチパチ歌ったりしないことを知っています。そこからは夢想、伝説、宗教が別々に生まれます。

それ故に国境があることを決して否定する必要はありません。反対にそのことをもう少し主張することが重要です。その時に本当の原因が分かります。遠くを見る思想は、屢々山のように進路を遮ります。近づくことです。殆ど登りが無い荘厳な谷があります。そこの無限に広がる平原で、あなたには壁があることを考えました。

そうです、沢山の国境があります。主権を有する国々があります。それらの国々は人間や、人間の思想を彫刻します。現実の国境を飛び越えるには、二百メートル飛べば十分です。日向から日陰へ移れば十分です。そしてバレスは、『コレット・ボドシュ』の中で用心することもなく、そのことを十分に見せていました。それというのも、二角帽に賛成し、ヘルメットに反対する小冊子の文書を忘れて、メス地方の美德の力を正直に考えて手に入れたのです。でも彼は、板や水や木や土で出来た家が態度や思考を支配し、外国人の心を捕らえて教育したのです。もっと適切に言うなら、外国人の子供たちを教育したのです。人が生活するには何時も国がある、と云うではありませんか。意味深い真実です。祖国とは地理のものです。歴史のものではありません。そして政治的権力は、そこでは何も出来ません。カンパールの或るブルターニュ人は、主張する限りは大地や水や太陽の力によってラ・ブイユのノルマンディー人と違います。しかし、あなたはペルシュ地方の人はコー地方の人と似ていると思いませんか。そうです、ダイヤモンドのように固い祖国があり、切り取ることも消すことも叶いません。そうなれば国境を作ったのは、これら

の故郷が異なる人々ではないのです。私は、憲兵の帽子について自分の考えを示す必要はない、
ということをそこから理解します。

(一九〇九年九月十三日)

五十五 奢侈税 (IMPÔTS SOMPTUAIRES)

奢侈税、別の言い方をすれば、贅沢な消費についての税金は、恐らく最も公平に適っています。そして、全て所得に税を課すことを主張して、現実の今の慣習を考慮に入れなければ、私たちは多分、生産せずに消費ばかりする人々を優遇することになります。

これらの全ての観念は頭を混乱させます。何故なら私たちは、金持ちの性格を殆ど全て考え違いをしているからです。金持ちは、黄金やお金によって成ると信じていますが、そこには間違いが二つあります。貧乏人が皆の財産の一部をこっそりくすねるようにして生きている時、お金を貯め込む人が金持ちであると私たちは思っています。逆に、取得した財産を浪費する陽気な相続人は、けちな者によって没収されたその財産を、私たちに返却しているのだと考えます。ところが正確に言うと、本当はその反対なのです。

実際の財産は、自動車、黒檀などの高価な木材、小麦、葡萄のように人間が産んだ産業によって変化したり、移動したり、増えたりするものです。私は、小麦で一杯の屋根裏を持っています。もしも私が享受したサービスを小麦で支払ったなら、その後は実際にもっと貧しくなるでしょう。しかしお金で支払うなら、屋根裏を見ながら支払うべき財産に相当する金貨しか支払いません。もしも私のお金を受け取った人が土に埋めて死ねば、私の小麦は助かります。それは私がお金を支払わなかったのと同じようなものです。穴倉に百万枚の金貨を持っているけちな人は、自分の楽しみに何年もかかって使うことが出来ます。彼の金貨は、他人の労働に対しての権利を有するのと同じです。それ故に、もしもこのけちな人がグランデ神父のように生きて、祭壇に自分自身を釘付けにしたなら、彼は所有している労働の日々の権利を決して行使しないでしょう。金貨を取って置く代わりに、もしも金貨を靴や綿布を増産する新しい機械を作って使おうとしたなら、その時は何も求めないばかりか、自分の財産を皆の宝にしていると言わねばなりません。

しかし、けちな人は死にます。浪費する甥が後を追います。レースの付いた服を製造しなければなりません。そこでの労働は無駄です。私たちが必要としている物の貯蔵を増加することにはなりません。しかし、レース編み機によって祝福されたこの人間は、私たちに貧しくさせます。同じこの人間は、ベルギーのオーステンデからニースまで車で送って貰います。又、ノルウェーからエジプトへ全速力で船で航海します。しかし、それは単に退屈しているから他の場所へ行くだけなのです。それは無駄な労働です。そして、ホテル業者や運転手や自動車修理工場主に喜ばれるこの人間は、生産することなく消費しているのです。何日もかけます。坑夫や精練工や道路坑夫が労働にける日数があります。全てはもっと速く行かうため、そして更にもっと速く戻って来るためなのです。貪欲で暴君的なこれらの収入には、豊かで有益なけちな人の収入よりも徴収官に納める義務が最早ないと考えるなら、所得税という考えには大きな不公平を閉じ込めて持っていないかどうか、自問することになります。

(一九〇九年九月十四日)

五十六 累進税 (L'IMPÔT PROGRESSIF)

税率が一定の所得税は、受け入れられていないようです。何故なら必要なものと余分な段階のものに、差別を設けていないからです。特に贅沢でないからこそ、人はそれを望むまでもないのです。それ故に累進税は、必然的に贅沢を駆逐するかどうか検証しなければなりません。でもそれは明白に分かりません。月並みな収入しかない人々では分かりません。只単に、生産せずに生きているばかりでなく、贅沢や装身具や芝居や散歩やパレードのために財産の大部分を遣う人でも分かりません。逆に、けちまでいかになくても、贅沢な部分を余りに軽蔑する企業家でも分かりません。その人は何か他のことに心を奪われた人でしかなく、新商品を再び生産するために儲けて大金を持っている人かもしれません。明らかに彼らは、このやり方でだんだんと金持ちに成って行くのですが、それでも彼らが率先して新商品を次々と市場に出して行くお陰で、全消費者にとっての利益がない訳ではありません。

しかし、その上で更に私は言います。彼らが貯めて生産方法を変えたお金は、浪費が深い穴のような贅沢に嵌まらない限り、実際にはそれは共有財産であると私は言います。贅沢な消費が全て禁止されたと仮定してみましょう。その時、地主は自分の活動を行行使する方法でしか富裕さを引き出せません。それ故に彼は、財産の利用というものを私たちに全て任せていると言えます。彼は私たちの財産の管理人でしかありません。誰かにお金が遣われなければ、皆のものです。累進税は、皆の利益を考えないような非常に馬鹿げた収入でもあるこれらの賢明で地味な収入にも税を課しているのは明白です。何故なら本当の無秩序とは、大きな財産があることではなく、馬鹿げた支出があるかもしれないことであるからです。

考察すべきことは他にもあります。調和の中にある社会には、必需品、半分の贅沢品、贅沢品、絶対的に個人的な物とがあります。消費は仕事です。贅沢品の消費は、贅沢品の仕事です。そして、消費は〈賢明さ〉に似ていると仮定してみましょう。満足感、清潔さ、健康、節制、教養が厳密な養分となって贅沢の中にあるまでになった贅沢の仕事を少なくしたり廃止して、先ず必需品のことを考えないのでしょうか。そのようにすれば賢明な社会になるのでしょうか、その中には墮落した地域も、哀れな人々もおります。それ故に有益な仕事を押し進めるのであり、出来る限り役立たない仕事は止めるようにするのです。ところで累進税と言っても盲目の累進税は、全てを果たしておりません。何故なら、もしも私が必需品の靴を作って一年間に十万フランを稼いだなら、それ以上の代金を贅沢品である徽章や勲章、ダイヤモンド、レースを売る十人の商人に支払うとします。彼らは各人が一年間に一万フランを稼ぐだけであるからです。

(一九〇九年九月十八日)

五十七 嘲笑的な教育者たち (PÉDAGOGUES MOQUEURS)

私は愚かな教育者と知り合いました。彼は生徒に勉強させる時、試験をやって重々しく言うのでした、「私は試験の正解をあなたに話しません。あなたは何時も正解を余りに良く考えるからです。間違いも理解しましょう」。牛のように良識と反対のことをやっている男です。善を理解すること、善を増大させること、つまらないことに関心を持たないこと、そして一言で言うなら、子供だけが持つ宝物を発見させること、それが子供を指導するための本質的な仕事です。それというのも、はさみで武装した修道士のように、悪を切り取って善に到達すると考えることは非常に現実離れしているからです。全く反対に、悪を避けるというよりも寧ろ善に向かって悪や平凡を指導することが、善に到達することであると私は信じるからです。何事も褒める術を心得ていることです。でも、それは難しいことであると思わなければなりません。

そのことを私が如何に理解しようとも、博士号を取得した馬鹿者どもは弟子を侮辱することしか求めていないように見えました。彼らは、レベルの低い学問領域で馬鹿の足を投げ出して蹴ることで、自分自身を出来るものなら最も高い処へ持ち上げるようにしているとは見えませんでした。確かに些細なことかもしれませんが、私はそれを軽蔑していました。他方では、それが確かとは思えず、教養とか優しさとか臆病がもっとあると私は理解していました。哀れな子供が外見上は全ての翼を身に付けて急速に動かしていることを、この学識ある田舎者が顔をしかめておかした文章を大声で読んだ時には、彼らは眼に涙を浮かべていました。ボレアス(1)の一吹きにあった哀れな水です。水上には惨めな残骸があります。私は小学生の怒りを可愛いと思っていました。何時も無言ではなく、声を出していました。結局のところ、それは何時も同じことです。良い趣味は伸ばしますが、創意工夫は嫌われます。全く術学者なのです。この若々しい大地に紙製の花々を刺すではありません。寧ろ、重大な間違いを正しく導いて耕すことに専念することです。それは全て独りで行ったことです。真理というものは、違いから出てきます。形式の華やかさというものは、生まれた時は不条理で夢想的なイメージから生まれます。そして詩を編んで創らねばならないのです。狂気を立て直すのでないとしても、私の英知は何と共に生まれるのでしょうか。

しかし、最も憎むべきは数学者たちでした。彼らは、治しようもない愚かさの印を私たちに発見させるためにしか存在していないように見えました。私はそれから十分に自分を守っていたのです。何故なら私には正確な記憶があったからです。代数学が何かちぐはぐな話の儘になっているのを恐れて、私は何時も背後に寒気を覚えていました。私は、代数の先生のことを一年中思い出していました。従って、ゆったりとした慎み深い精神を持った生徒たちにとっては、何という虐殺なのでしょう。数学者たちは罌に落ちて、パニック状態になって言葉を発するだけでした。彼らは滑稽でした。私たちは笑うだけでした。賢者は哀れな子供に言うのでした、「あなたは確かに何かを言いたいのであるが、あなたは言葉に騙されている。そして、あなたを愚か者のように見せているのは恐怖心である」。私はこの種の言葉を何度も何度も待っていました。そして私はそれを言わなければならないのに、何時も無駄なのです。

(一九〇九年九月二一日)

(1) ボレアスは、ギリシア神話に出てくる神格化された北風

五十八 占星術師たち (ASTROLOGUES)

「昔、王には占星術師たちがいて、空から前兆を読むために大金を支払っていました。そのことは、それでも少しは人間性が大切にされていたことが分かります」とセレブロフは言いました。

「あゝ、分からなければならないだろう」と哲学者は言いました。そしてトランプを切り始めました。別けて並べて、独り言を言い始めました、「褐色の髪の子、手紙、お金、少し遅れる」。忽ち、彼の周りに女性たちが皆やって来ました。彼は、両手の中も見せようとして、一行ずつの文字を一人ひとりに求めました。直ぐに書かれた文書の束が、広げられたトランプの上に置かれました。そして、驚くべき確信から全てのことを言い当てました。表面的には乱暴ですが、素直であるとか、内心はおべっか使いであるとか、性格を分析します。恰もすっかり若い娘であったかのようにいる老女のことを話します。逆に、若い娘を祖母のように扱います。それというもの、一人ひとりには自分に無いものを望んでいるのです。そして信じてもないことを大声で言っています。ところがこのゲームは、生き生きとした情熱を蘇らせました。彼はそのことを容易に打ち明けませんでした。

彼はセレブロフと一緒に夕焼け雲の山々に見とれながら立ち去った時、女性たちを少し嘲笑していました。しかし、その哲学者はまだ抜け目がありませんでした。彼は言いました、「事物の王は、想像力をかき回している。そして、活発な印象は私たちに信念を与えてくれる。雲から降りて来る栄光の光がここにはある。もしも親愛なるセレブロフよ、あなたのために私が前兆をそこに見たなら、これらの光を全て伴ったあなたの中に、私の話は入っていくだろう。そして、あなたは信じられないくらいに厚く受け入れられることだろう。だから、あなたには栄光が訪れるのだ」。

セレブロフは言いました、「私はそれを探することは決してありません。私の労作が多くの人に読まれることも決してないでしょう」。

哲学者は言いました、「栄光は決してざわめきではない。でも栄光を探さずに希望を持つことが人間としての真の喜びである。それを掴むのだ。金星は降りて来る。そして次に太陽も降りて来る。程なく東の空には火星が昇り、その後から土星が昇って来るだろう。愛はあなたから去り、野心があなたを捕らえている。そして背後には分別がない訳でもない。あなたは戦いを愛し、それに勝つが、それを信じ込んでもいない。まあ、それが星占いだ」。

セレブロフは言いました、「それは悪くありません。私は歳に似合った自然な秩序をそこに見ます。感じる事、行動すること、思考すること、そこには全てが描かれた人間の道があります。私の書物もその時は一つの行動になるでしょう。そうです、私の人生の頂上です」。

哲学者は言いました、「この雲からの美德によってあなたに満足し、そして私に満足して出発する。何時もそのようなことを彼らに話しながら、そして彼らが望んでいることを告げながら、人々に十分気に入られているのだ。私が王の良き占星術師になったことをあなたは理解するだろう」。

セレブロフは言いました、「又は、王の狂人です。何故なら、あなたは嘲笑しながら教えているからです」。

(一九〇九年九月二二日)

五十九 モルモットたち (LES MARMOTTES)

大地と大空が一緒に混淆する時、その時は昼間の世界へ向かう時で、草の葉一本一本が水滴を含んでいます、その水滴が切れた時を人は知りません。その時こそ秋です。水はその時、最早根から葉へ上昇することはありません。雲は大地の上を這い、植物たちは眠りにつきます。一つか二つの星の光しか見えなくなると、時が過ぎ去る早さに驚き、光陰矢の如しです。何故なら、美しかった空も同じでいることはないからです。天体は一回転して一日を形づくり、同時に一日は次の日に向かって少しづつ進んでいきます。青く輝く星である織女星（ベガ）が殆ど天頂点に見えたその時は、人々が眠りにつく時でしたが今はもう地平線に沈んで見えません。その他の星々は、まだ姿を見せて光っています。昴は蜜蜂の群のように身を寄せ合って輝き、その下方には牡牛座のヒアデスがアルデバランとオリオンの赤い星と共に美しい三角形を作っております。オリオン座の三つ星は遠くないところにあり、それ故今日は大晦日なのです。

本当のところ、もしも投げやりな生活を送っていたなら、全てのものと一緒に今は眠りにつくことになるでしょう。木の葉が黄色になるにつれて、両眼に眠気が落ちてきます。真昼になっても木々の下に夜の欠片が残存し、夕方になっても全てが消えて仕舞う訳ではありません。それでもこの時から「おやすみなさい」と言って眠ることを考えます。人は歴史家になり、過去に起きたことを考えます。今日という日は昨日の方に傾いていて、明日の方には傾いていません。夕方は思い出すための時間になります。

色々な言葉の語源を繙くと、昨日 (hier) は夕 (soir) に近く、明日 (demain) は朝 (matin) の意味にも用いられます。そのことを考えてみるとびっくりしますが、思ったよりも大変に早く人はそれを理解します。時間のことを考えるのは日中ではありません。人は行為を好み、時間を気にせずに行為に没頭しますが、その時は朝です。そして時間のことを考えるときは夕方です。夕方は耕し終えた畑を注視する時で、朝は耕そうとする畑を想像する時です。そのように考えることによって、休息と辛い仕事の折り合いが付きます。夕方はその日を確認する時であり、朝は工夫する時です。そのために夕方のイマージュは過去の観念に結び付き、朝のイマージュは未来の観念に繋がって行きます。季節についても同じ様相に気付きますし、一年についても一日と同じことが言えます。

そのことに対して戦う人間がおります。彼はランプに火を点け、本を読み、思考します。彼は考えすぎること、余り眠らないこと、そして秋の夜長の声を無視することの危険を冒します。しかしながら進歩というものには、この反骨の精神が必要です。私たちはモルモットになることを拒否することです。可愛い子供たちが本を詰め込んだ鞆を持っていたり、学校に明かりが煌々と輝いているのを見て美しいと思う理由がまさにここにあります。最早、蜜蜂たちの出番はありません。蜜蜂たちが眠っている間は、私たちが自分の意志で目覚めている時です。夕方からの学校とは、人間として行為すべきものなのです。

(一九〇九年十月六日)

六十 火星の運河 (LES CANAUX DE MARS)

惑星である火星の住民に関する熱心な議論は、余りに神学的だと思います。この驚くべき疑問を胸に抱きながら、神がいることを人々は子供たちに証明していました。「もしも神がいらないとするなら、誰が〈世界〉を創ったのでしょうか」。今、神を信じない天文学者は質問されています。「もしも火星人がいなかったなら、火星の運河を造ったのは誰でしょうか」。それは水晶の標本を見ながら質問したのと殆ど同じようなものです。「水晶を削ったのは誰なのでしょうか」。もしも私たちが結晶した形を知らなかったなら、そしてもしも空から降って来る石の中にそれを見付けたなら、恐らく何処かの惑星に、幾何学を知っている石を削る熟練した職人がいると信じたことでしょう。少なくとも私たちは、一定の形をして均斉の取れた結晶体は、幾何学や石切職人でなく、溶解して生まれることを知っています。そこから理解するのは、作品を見て人間の仕事であると考え、そして火星の運河から火星人を考えることは危険であるということです。

しかし、最近はその疑問が少し変化して来ていると私は思いますが、思いがけないことです。それは最早、天文学が議論していることの解釈でしかなく、事実はその儘です。実際に、運河と理解しているのでしょうか。この疑問を吟味することから始めるのが良いでしょう。しかし、それは子供の眉唾物で信用出来ないことであるとも言われて来ました。その上に、正しい仮説もあったでしょうし、忘れ難い議論もあったでしょう。その後で子供が言う方を向きますが、子供は決して眉唾なことを言いませんでした。火星の惑星についても同じです。多くは間違った認識であるとか、少なくとも不明瞭さに由来しているように思えます。解釈を証明しようと思っっているのに、既にその解釈を前提としているようなものなのです。運河と理解して、運河だと言うことは、既に全然理解しないで多くを言っていることなのです。

同じ視覚の中でも、或る先入観が殆ど何時も無意識に、何時の間にか這入り込んでいるのは確かです。もしも樹木の中に、遠くからとか注意しないで、マネキン人形を見たなら、私は人間を見たと信じるでしょう。一般的に私が全く新しい何かを見たなら、本能的に既知の物をそこに見出すことでしょう。或る人が火星の運河を見ても、別の人は森林地帯を見るのも、この理屈によるからです。それは無知の人が、月の表面に両眼や鼻や口を見るのと同じ理屈です。

これらの考えから私は、事実を語るものを良く理解出来るようにしています。それは非常に難しいことです。決して先程述べた無知の人が分かるものではありません。あらゆる装置と科学的方法がなければなりません。更に、それらのものを慎重に使わなければなりません。そして言います。「ここが北極だ」と言うには、全てのアカデミー会員がそこに行かなければならないでしょう。北極という事実を勝ち取らなければなりません。証明とは科学の言葉です。事物そのものを良く知らない限り、子供じみた質問で遊ぶようになります。「それはどこから来るの。誰がそれを造ったの」。そのことが良く分かれば最早、荒唐無稽な乳母の話は面白くなくなるでしょう。何故、二足す二は四であるのか、誰も質問しません。

(一九〇九年十月十一日)

(次号へ続く)

一ノルマンディー人のプロポ III
【2014年3月号】

<http://p.booklog.jp/book/82570>

著者：アラン （翻訳：高村昌憲）

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/82570>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/82570>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ